



# この一冊

Vol. 130



当会会員 味岡 良行 (40期) ●Yoshiyuki Ajioka

この作品は、第二次世界大戦中に日本とドイツの間の往復を試みた日本の潜水艦の物語です。昨年、吉村昭の『白い航跡』を吸い込まれるように読んだので、ハズレはないだろうと期待して購入しました。

物語は、伊号潜水艦が、日本国内又は東南アジアから、インド洋を横断しアフリカ南端の喜望峰を迂回して大西洋を北に航行し、当時ドイツが占領していたフランスまでの片道約3万キロを往復する作戦を描いています。極秘に遂行されるこの航海は、佐官級の武官、その分野の権威である技術者をドイツ又は日本から乗せ、ドイツからはジェットエンジン、レーダー、対戦車砲弾に関する技術資料と専門技術者を日本に運ぶことを目的としていました。ドイツへの見返りは、航跡が目立たない酸素魚雷と潜水艦が潜航中に無音で静止できる装置でした。当時のスーパーエリート層が、撃沈される可能性の高い方法で日独間の往来を試みなければならぬ程に追い詰められた戦局であり、かつ日本は人材も乏しい状況でした。

片道約2か月間、潜水艦と

## 『深海の使者』



吉村 昭 著  
文春文庫  
660円(税別)

いう閉鎖された、狭く、暗く、静ひつな空間で、連合国軍の哨戒と攻撃をかいぐり、かつ怯えながら深く静かに潜航する様は、艦内での過酷な生活も加わって、読者を陰鬱な気分させます。生還者などから取材した資料に基づき、史実に沿っているので、描写が詳細で生々しく、現実感があるのです。解放された空間への脱出が不能という潜水艦特有の恐怖感と閉塞感、想像するだけでも息苦しくなりますが、それが私を惹きつけた理由かも知れません。

戦争後期、合計5隻の伊号潜水艦が次々と日独間の往復を試みましたが、成功したのは1隻のみでした。これに費

やした膨大な人的・物的資源と労苦を知ると、実にハイリスクな賭けに挑まざるを得なかった事情がうかがえます。ジェットエンジン、レーダー、対戦車砲弾に期待して戦局の挽回を狙った戦略的意図は、有為な人材や技術資料とともに深海に沈降して失敗に終わっています。

何という虚無感、絶望感、無力感、人材の浪費、無意味な死であるか…。

海底で死んでいくのですから誰もその様子を見ていないし、どんな苦痛や苦悩があったかも分かりません。ドイツ映画『Das Boot』(1981年・邦題『U・ボート』)は、そうした状況を描いた映画でしたので、重ね合わせて想像してしまいます。『U・ボート』の場合、損失743隻、4万人の乗員のうち犠牲者は3万人ですので、損失損耗率は約7割です。日本とは艦艇と乗員数の桁が違いますが、損耗率は日本の方が『U・ボート』よりも高かったのではないのでしょうか。

巻末で解説者半藤一利は、「悲しすぎる戦記」と評しています。本当に悲しく、むなしい実話です。 ■